

北海道地震津波の記録

「海が吠えた日」より

その時 私は!!

洪崎 田原 正義

私の家は代々海産物加工業を営んでおり、仕事の便宜上、昭和十七年ごろから母屋から浜の加工場の方に家族全員が移り住んでおりました。

昭和十九年八月に父が海軍に召集され、二十年に大阪で戦災に遭った貞子叔母が、続いて和歌山市で戦災に遭った叔母(柳本花子と子供二人)が帰郷し、総勢十二名が一緒に生活をしていました。母屋には昭和二十年秋海軍より復員して来た政男叔父とその家族が住んでいた。

北海道地震のあった昭和二十一年、私は一年遅れで県立海部中学校(現日和佐高校)に入学し、戦後の混乱の中を汽車通学していた。

十二月二十一日午前四時ごろ、小用に起きた私は見るともなく沖を眺めた。スルメイカを釣る漁火が水平線いっぱいには遠なり、浜辺に奇せる波は快い音を響かせていた。当日二階には私と祖母、貞子叔母と柳本の家族が、階下には母と四人の弟妹が就寝していた。再び二階に戻った私はもう一眠りしようと思っても布団にもぐり込んだ。その時であった。

ゴ—という地鳴りと共に大地震が起きた。それは未だかつて経験したことのないものすごい揺れでありました。天井から吊された電灯が天井に二、三回打ちつけられたと思った途端に灯が消えて暗闇となった。最初には「世直し世直し」と唱えていた祖母は「これはどうしたんな。これはどうしたんな。もう堪えてくれ」と泣き声になっていた。どのくらい続いたであろうか。大きく烈しくすごく長く感じた。階下の母と弟妹たちはすぐに浜に飛び出した。二階では貞子叔母が地震の揺れの最中に「早く逃げんと怖い」と言って階段の途中から落ちてすり傷をついた。二階にあった算盤鏡台等の家具類はことごとく倒れてしまったが、それでも幸い全員に怪我は無かった。ようやく揺れが止んだ。津波が来るかも知れない。衣類を着けるべくマッチを探したが気が動転してか見つからない。服は算盤の下敷きになっていた。それを持ち上げようとしたが重くてどうすることもできない。

浜に逃れた母らは鈴木のおば(父の従妹で平滝の納屋に住居していた)とその家族に逢い地震のすさまじさを話していた。「潮が来よるぞー、早く逃げよう!!」とタンガの方からの叫び声に、母は弟妹たちを連れ鈴木のおばらと「おまいら、早く逃げよう。津波ぞ。津波が来よる言よるぞ。おたいら、先に逃げるけん。早く逃げよう」と言い残して家を後にした。鈴木のおばは逃げる途中、何か食料品でも持って来なければと家に引き返したが、二人の子供は母らと共に逃げた。母は母屋の叔父家族に津波の襲来を告げ、昌寿寺山に逃げるべく福岡鉄工所の露地に入ったが、行く人得る人でどうすることもできない。やっこの思いで引き返し杉玉神社へ一目散に逃げた。